心理・福祉領域の進路希望に関連する要因の検討

神庭　直子[1]・河合　美子[1]・松田チャップマン　与理子[1]
山口　　一[1]・石川　利江[2]
[1]桜美林大学健康福祉学群・[2]桜美林大学大学院 国際学術研究科

Investigating Factors Associated with Career Aspirations
in the Fields of Psychology and Social Welfare

Naoko KAMBA[1], Yoshiko KAWAI[1], Yoriko MATSUDA-CHAPMAN[1],
Hajime YAMAGUCHI[1], Rie ISHIKAWA[2]
[1]College of Health and Welfare, J. F. Oberlin University
[2]International Graduate School of Advanced Studies, J. F. Oberlin University

キーワード：学問への期待、職業イメージ、進路選択、
心理学教育、社会福祉教育、被援助経験

問題と目的

文部科学省が実施した「令和 2 年度学校基本調査」によれば、高校生の高等教育機関への進学率は 83.5%、大学進学率は 54.4% であり、いずれも過去最高となった（文部科学省，2020a）。大学選択は過半数の高校生が直面する大きな課題であるが、高校生はどのようにして大学を選択しているのであろうか。高校生が大学選択の際に重視することについて優先順位の高い項目を 3 つ選択させた結果、「学びたいことが学べる」が 71.2%と最も多く、2 位の「就職に強い」（28.2%）や、3 位から 5 位の「地元から通える」（20.9%）、「自分の学力で入れる」（20.3%）、「学費が安い」（20.1%）を大きく上回っていたという報告がある（学研教育総合研究所，2018）。また、将来なりたい職業があって進学する者が国公立大学で 33.2 %、私立大学で 34.3%、学びたい学問を志して進学する者は、国公立大学進学者で 40.4%、私立大学進学者で 36.1%であり、職業もしくは学問のいずれかの目的を持って大学を選んでいる高校生は 70% に及ぶという報告もある（ベネッセ教育総合研究所，2013）。しかし、学際的・複合的な領域が増加し多様化する学問領域や、現在の社会に数多くある職業について理解し選択することは容易ではないと推察される。高校教員からの

サポート（太田・飯田，2018）や保護者からのサポート（成田・森田，2015）、そして大学からの学問領域や職業に関する情報の提供が進路選択における重要なリソースとなると考えられる。また大学においては専門教育やキャリア支援を行うにあたり、入学してくる学生が学問や職業に対してどのようなイメージを持っているかを理解することが重要であると考えられる。

さて、桜美林大学健康福祉学群精神保健福祉専修においては、2006 年度の専修開設以来、心の健康とその支援に関する社会的な関心とニーズに応え、メンタルヘルス領域のソーシャルワーカーである精神保健福祉士の養成を行ってきた[1]。また、2018 年度より精神保健福祉コースと実践心理コースを設置し、精神保健福祉士と公認心理師の養成教育を行っている。大学における専門職教育と学生支援の観点から、入学前の高校生やその保護者が心理職や福祉職、また心理学や社会福祉学をどのようなものと捉えているかというイメージの理解が重要であると考え、神庭・河合・松田チャップマン・山口・石川（2021）では、心理と福祉という近接領域を相互に比較しながら、心理学や社会福祉学への期待、心理職や福祉職に対するイメージの因子構造について検討を行った。本研究では神庭他（2021）の検討を踏まえ同一のデータセットを用いて、高校生の心理学・社会福祉学への期待や心理職・福祉職のイメージのどういった側面が大学での専攻希望や心理職・福祉職の志望と関連しているかについて、探索的に検討を行う。

さらに、心理・福祉領域の進路希望に影響を及ぼすものとして、「周囲に心理（福祉）の仕事をしている、またはしていた人の有無」と「自身や身近な人が心理（福祉）の専門家から援助を受けた経験の有無」にも着目する。心理学に対する専攻志望動機と専攻への期待を量的に分析した谷口（藤本）・金綱（2013）は、心理学を専攻する学生は自他の否定的経験が契機となり、心理学を学ぶことで自己が抱える問題の解決を試みようとすること、そして他者が抱える問題の解決のための専門的スキルを獲得しようとすることを指摘している。ただし、谷口（藤本）・金綱（2013）で「自他経験・問題解決」と命名されている専攻志望動機は、自己や身近な人のいじめや不登校の経験、病気・怪我・障害等の経験、心理士への相談経験による心理職への憧れや反発など、様々な内容の 26 項目が同一の因子にまとまっており、項目を整理する余地があると思われる。また、本研究では心理と福祉の両領域について検討を行うため、両者に共通で用いることのできる質問項目とする必要がある。そこで、本研究では、専門職と身近に関わる経験の有無に焦点を絞り、周囲に心理職・福祉職が存在するかという点と、心理職・福祉職からの被援助経験の有無について検討を行うこととした。

加えて、進学を希望する高校生の 80% が進路に関して保護者と話をしていることから（一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会・リクルートマーケティングパートナーズ，2020）、高校生の進路選択には保護者の学問への期待や職業イメージ、専門職と身近に関わる経験などが影響を及ぼす可能性も考えられる。そこで本研究では、高校生の保護者が自分の子どもに心理・福祉領域の進路を推奨する程度に関連する要因についても検討を行

うこととする。

以上のことから、本研究では、高校生における心理・福祉領域の進路希望と保護者における子どもへの心理・福祉領域の進路の推奨に影響を及ぼす要因として学問への期待、職業のイメージ、周囲に心理（福祉）職の有無および心理（福祉）職からの被援助経験に着目し、その関連を探索的に検討することを目的とする。

方法

1. 調査対象者と調査手続き

高校生と、高校生の子どもを持つ保護者を対象に、全国に465万人のアンケートモニターを保有するインターネット調査会社（株式会社クロス・マーケティング）に調査を依頼した。高校生と保護者は親子でマッチングされたものではなく、それぞれ別のサンプルであった。調査回答の質の向上を試みるため、増田・坂上・森井（2019）の手続きを参考として「冒頭宣誓」の手続きを取り入れた。これは、回答者に調査票への回答前に、真面目に回答するという宣誓してもらうものである。また、1つの設問に対してすべて同じ回答をしたサンプルの除外（ストレートラインカット）と、回答時間が4分未満の短時間回答者の除外により、それぞれ300名の回答を得た。

2. 調査時期

調査は2020年2月中旬に実施した。

3. 調査内容

（1）高校生に対する調査内容

①属性

高校生に対しては、学年、性別、学科、高校卒業後に希望する進路、進路選択に関する相談先と情報源、同居している家族について尋ねた。保護者に対しては、年齢、性別、最終学歴、心理学・社会福祉学の学習経験、同居している家族、高校生の子どもに希望する最終学歴について尋ねた。

②心理学・社会福祉学への期待（高校生・保護者）

神庭他（2021）で因子分析により構造が確認された項目を使用した。高校生における心理学への期待は「心の理解とケア」、「心理的洞察」、「コミュニケーション」の3因子13項目、社会福祉学への期待は「弱者支援と社会貢献」、「相談援助と人間理解」の2因子15項目を用いて測定した。保護者における心理学への期待は「心の理解とケア」、「心理的洞察とコミュニケーション」の2因子15項目、社会福祉学への期待は「人間理解と相談」、「弱者支援と社会貢献」の2因子15項目を用いて測定した。回答は、それぞれの学問を学

ぶとできるようになると思うことについて、「1= そう思わない」から「5= そう思う」の5件法とした。

③心理職・福祉職のイメージ（高校生・保護者）

神庭他（2021）で因子分析により構造が確認された項目を使用した。高校生における心理職のイメージは「専門性」、「社会的評価・労働条件・自己価値」、「職務負担の軽さ」の3因子22項目、福祉職のイメージは「専門性」、「職務負担の軽さ」、「自己価値・社会的評価・労働条件」の3因子26項目を用いて測定した。保護者における心理職のイメージは「専門性」、「自己価値・社会的評価」、「職務負担の軽さ」、「収入と雇用」の4因子26項目、福祉職のイメージは「専門性」、「社会的評価・自己価値」、「職務負担の軽さ」、「確実な職務遂行」の3因子24項目を用いて測定した。それぞれの職業に対するイメージについて、「1= まったくあてはまらない」から「6= 非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。

④心理職・福祉職との関わりの経験（高校生・保護者）

「周囲に心理（福祉）の仕事をしている、またはしていた人の有無」（周囲に専門職の有無）と「自身や身近な人が心理（福祉）の専門家から援助を受けた経験の有無」（自身や身近な人の被援助経験）を尋ねた。回答選択肢は「はい」、「いいえ」、「わからない」とした。

⑤高校卒業後に学ぶ分野や就く職種の希望（高校生）

高校生に対して、大学で心理学や社会福祉学を学んでみたい程度と、将来心理職や福祉職に就きたい程度を尋ねた。回答は「1= そう思わない」から「5= そう思う」の5件法とした。

⑥子どもが高校卒業後に学ぶ分野や就く職種に対する推奨（保護者）

保護者に対して、子どもが大学で心理学や社会福祉学を専攻することと、将来心理職や福祉職に就くことを推奨する程度について尋ねた。回答は「1= そう思わない」から「5= そう思う」の5件法とした。

4.　倫理的配慮

調査は無記名であり、調査協力に同意する場合のみ回答画面に入ることが可能となる形式をとった。回答データの記録されたファイルは研究者のみが閲覧できる状況で管理した。本研究は、桜美林大学研究活動倫理委員会の承認を得て実施した。

結果

1. 調査回答者の属性

高校生300名から回答を得た。在籍する高校の教育課程の分類別人数は、全日制250名（83.3%）、定時制14名（4.7%）、通信制36名（12.0%）であり、学年の内訳は1年生71名（23.7%）、2年生105名（35.0%）、3年生124名（41.3%）であった。定時制および通信制の4年生以上の生徒はいなかった。性別の内訳は、男性145名（48.3%）、女性149名（49.7%）、それ以外2名（0.7%）、答えたくない4名（1.3%）であった。回答者の年齢は15歳から24歳であり、平均年齢は17.08歳（*SD*=0.91）であった。

高校卒業後に希望する進路としては、大学進学が最も多く188名（62.7%）、次いで就職が49名（16.3%）、専門学校進学が38名（12.7%）、短期大学進学が11名（3.7%）、その他14名（4.7%）であった。

保護者300名（男性150名（50.0%）、女性150名（50.0%））については、高校生の子どもをもつ36歳から69歳の保護者から回答が得られ、平均年齢は49.15歳（*SD*=4.92）であった。保護者の最終学歴は大学卒業が最も多く129名（43.0%）であり、次いで高校卒業が78名（26.0%）、専門学校卒業が40名（13.3%）、短期大学卒業が35名（11.7%）、大学院修了が12名（4.0%）、その他が6名（2.0%）であった。

子どもに希望する最終学歴としては大学卒業が最も多く183名（61.0%）、次いで子どもの希望によるとするものが39名（13.0%）、高校卒業が28名（9.3%）、専門学校卒業が26名（8.7%）、大学院修了が15名（5.0%）、短期大学卒業が6名（2.0%）、その他が3名（1.0%）であった（Table1）。

Table1　回答者の属性

高校生			保護者		
年齢			年齢		
M（*SD*）	17.08	(0.91)	*M*（*SD*）	49.15	(4.92)
最小値	15		最小値	36	
最大値	24		*最大値*	69	
	度数	（%）		度数	（%）
性別			性別		
男性	145	(48.3%)	男性	150	(50.0%)
女性	149	(49.7%)	女性	150	(50.0%)
それ以外	2	(0.7%)			
答えたくない	4	(1.3%)			
学年			最終学歴		
全日制高校１年生	64	(21.3%)	高校卒業	78	(26.0%)
全日制高校２年生	82	(27.3%)	専門学校卒業	40	(13.3%)
全日制高校３年生	104	(34.7%)	短期大学卒業	35	(11.7%)
定時制高校１年生	4	(1.3%)	大学卒業	129	(43.0%)
定時制高校２年生	5	(1.7%)	大学院修了	12	(4.0%)
定時制高校３年生	5	(1.7%)	その他	6	(2.0%)
定時制高校４年生以上	0	(0.0%)			
通信制高校１年生	3	(1.0%)			
通信制高校２年生	18	(6.0%)			
通信制高校３年生	15	(5.0%)			
通信制高校４年生以上	0	(0.0%)			
学科					
普通科	238	(79.3%)			
専門科	62	(20.7%)			
高校卒業後に希望する進路			子どもに希望する最終学歴		
就職	49	(16.3%)	高校卒業	28	(9.3%)
専門学校へ進学	38	(12.7%)	専門学校卒業	26	(8.7%)
短期大学へ進学	11	(3.7%)	短期大学卒業	6	(2.0%)
大学へ進学	188	(62.7%)	大学卒業	183	(61.0%)
その他	14	(4.7%)	大学院修了	15	(5.0%)
			子どもの希望による	39	(13.0%)
			その他	3	(1.0%)

2. 高校生における心理・福祉領域の進路希望とその関連要因

(1) 記述統計量

高校生における学問への期待と職業イメージ、心理職・福祉職との関わりの経験、高校卒業後に学ぶ分野や就く職種の希望について記述統計量を算出した（Table2, Table3, Table4）。

Table2　学問への期待と職業のイメージの下位尺度得点の記述統計量（高校生）（*N*=300）

	心理学への期待			心理職のイメージ			社会福祉学への期待		福祉職のイメージ		
	Ⅰ.心の理解とケア	Ⅱ.心理的洞察	Ⅲ.コミュニケーション	Ⅰ.専門性	Ⅱ.社会的評価・労働条件・自己価値	Ⅲ.職務負担の軽さ	Ⅰ.弱者支援と社会貢献	Ⅱ.人間理解と相談	Ⅰ.専門性	Ⅱ.職務負担の軽さ	Ⅲ.自己価値・社会的評価・労働条件
M	3.81	3.40	3.44	4.55	3.56	3.01	3.72	3.35	4.48	2.55	3.68
(*SD*)	(0.91)	(0.96)	(0.96)	(0.94)	(0.87)	(0.95)	(0.85)	(0.79)	(0.94)	(1.02)	(0.88)
最小値	1.00	1.00	1.00	1.44	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
最大値	5.00	5.00	5.00	6.00	5.78	6.00	5.00	5.00	6.00	6.00	6.00

Table3　心理職・福祉職との関わりの経験（高校生）（*N*=300）

	周囲に専門職の有無				自身や身近な人の被援助経験			
	心理職		福祉職		心理職		福祉職	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
はい	19	(6.3%)	72	(24.0%)	46	(15.3%)	23	(7.7%)
いいえ	242	(80.7%)	200	(66.7%)	224	(74.7%)	241	(80.3%)
わからない	39	(13.0%)	28	(9.3%)	30	(10.0%)	36	(12.0%)

Table4　高校卒業後に学ぶ分野と就く職種の希望（高校生）（*N*=300）

	学ぶ分野の希望				職種の希望			
	心理学		社会福祉学		心理職		福祉職	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
そう思わない	160	(53.3%)	185	(61.7%)	166	(55.3%)	189	(63.0%)
ややそう思わない	41	(13.7%)	56	(18.7%)	45	(15.0%)	51	(17.0%)
どちらともいえない	34	(11.3%)	39	(13.0%)	42	(14.0%)	45	(15.0%)
ややそう思う	45	(15.0%)	16	(5.3%)	30	(10.0%)	10	(3.3%)
そう思う	20	(6.7%)	4	(1.3%)	17	(5.7%)	5	(1.7%)
M（*SD*）	2.08	(1.36)	1.66	(0.98)	1.96	(1.27)	1.64	(0.97)

(2) 高校生の学問への期待、職業イメージ、専門職との関わりの経験が心理・福祉領域の進路希望に及ぼす影響について

高校生において、心理学・社会福祉学を専攻する希望や、心理職・福祉職に就きたいという希望に影響を及ぼす要因として、学問への期待や職業のイメージ、専門職との関わりの経験を想定し、その影響について検討を行った。

以下の分析では、心理と福祉のそれぞれの領域ごとに、周囲に専門職に就いている人の有無と専門職からの被援助経験のどちらか一方でも「わからない」と回答した者のデータは除外した。また両変数は、「はい」を1、「いいえ」を0とするダミー変数として分析に用いた。

心理学への期待、心理職のイメージ、周囲に心理職の有無、自分や身近な人が心理職か

ら援助を受けた経験（被援助経験）を説明変数とし、大学で心理学を専攻したい程度を目的変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。また、同様の説明変数を用いて、心理職に就きたいという希望を目的変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。「心理学専攻の希望」については、心理職のイメージの「社会的評価・労働条件・自己価値」の得点が高いほど、心理学を学びたいと思っているという関連が示された。「心理職の希望」についても、心理職のイメージの「社会的評価・労働条件・自己価値」が高いほど、心理職に就きたいと思っているという関連が示された。さらに、周囲に心理職がいるほうが、また、心理職からの被援助経験があるほうが、心理職を希望することが示された（Table5）。

同様にして、社会福祉学への期待、福祉職のイメージ、周囲に福祉職の有無、自分や身近な人が福祉職から援助を受けた経験（被援助経験）を説明変数とし、大学で社会福祉学を専攻したい程度と福祉職に就きたいという希望を目的変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。「社会福祉学専攻の希望」については、福祉職のイメージの「自己価値・社会的評価・労働条件」の得点が高いほど、社会福祉学を学びたいと思っているという関連が示された。「福祉職の希望」についても、福祉職のイメージの「自己価値・社会的評価・労働条件」が高いほど、福祉職に就きたいと思う傾向があることが示された（Table6）。

Table5　高校生における心理学専攻と心理職の希望についての重回帰分析結果
（*N*=246）

	心理学専攻の希望	心理職の希望
	β	β
心理学のイメージ		
Ⅰ　心の理解とケア	.040	-.064
Ⅱ　心理的洞察	.055	.115
Ⅲ　コミュニケーション能力	-.026	-.001
心理職のイメージ		
Ⅰ　専門性	-.028	.004
Ⅱ　社会的評価・労働条件・自己価値	.227 **	.204 *
Ⅲ　職務負担の軽さ	-.094	-.085
周囲に心理職の有無	.060	.132 *
心理職からの被援助経験	.107	.140 *
R^2	.080 **	.107 ***

***p<.001, **p<.01, *p<.05

Table6　高校生における社会福祉学専攻と福祉職の希望についての重回帰分析結果
(*N*=252)

	社会福祉学専攻の希望	福祉職の希望
	β	β
社会福祉学のイメージ		
Ⅰ　弱者支援と社会貢献	.032	-.007
Ⅱ　人間理解と相談	.028	.108
福祉職のイメージ		
Ⅰ　専門性	-.136	-.115
Ⅱ　職務負担の軽さ	.079	.075
Ⅲ　自己価値・社会的評価・労働条件	.209 *	.177 †
周囲に福祉職の有無	.017	.075
福祉職からの被援助経験	.007	-.059
R^2	.064 *	.073 **

**p<.01, *p<.05, † p<.10

3.　保護者における心理・福祉領域の進路推奨とその関連要因

(1)　記述統計量

保護者における学問への期待と職業イメージ、心理職・福祉職との関わりの経験、自分の子どもが高校卒業後に学ぶ分野や就く職種の推奨について記述統計量を算出した（Table7，Table8，Table9）。

Table7　学問への期待と職業のイメージの下位尺度得点の記述統計量（保護者）
(*N*=300)

	心理学への期待		心理職のイメージ				社会福祉学への期待		福祉職のイメージ			
	Ⅰ. 心の理解とケア	Ⅱ. 心理的洞察とコミュニケーション	Ⅰ. 専門性	Ⅱ. 自己価値・社会的評価	Ⅲ. 職務負担の少なさ	Ⅳ. 収入と雇用	Ⅰ. 人間理解と相談	Ⅱ. 弱者支援と社会貢献	Ⅰ. 専門性	Ⅱ. 社会的評価・自己価値	Ⅲ. 職務負担の軽さ	Ⅳ. 確実な職務遂行
M	3.53	3.22	4.50	3.94	2.91	3.36	3.12	3.58	4.59	3.71	2.62	4.15
(*SD*)	(0.78)	(0.73)	(0.78)	(0.79)	(0.75)	(0.89)	(0.71)	(0.78)	(0.85)	(0.79)	(0.83)	(0.90)
最小値	1.00	1.00	2.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.71	1.00	1.00	1.00
最大値	5.00	5.00	6.00	5.78	5.60	6.00	5.00	5.00	6.00	6.00	6.00	6.00

Table8　心理職・福祉職との関わりの経験（保護者）（*N*=300）

	周囲に専門職の有無				自身や身近な人の被援助経験			
	心理職		福祉職		心理職		福祉職	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
はい	33	(11.0%)	106	(35.3%)	36	(12.0%)	40	(13.3%)
いいえ	250	(83.3%)	182	(60.7%)	255	(85.0%)	249	(83.0%)
わからない	17	(5.7%)	12	(4.0%)	9	(3.0%)	11	(3.7%)

Table9　高校卒業後に学ぶ分野や就く職種の推奨（保護者）（*N*=300）

	学ぶ分野の推奨				職種の推奨			
	心理学		社会福祉学		心理職		福祉職	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
そう思わない	78	(26.0%)	75	(25.0%)	83	(27.7%)	84	(28.0%)
ややそう思わない	50	(16.7%)	54	(18.0%)	72	(24.0%)	65	(21.7%)
どちらともいえない	127	(42.3%)	136	(45.3%)	118	(39.3%)	127	(42.3%)
ややそう思う	38	(12.7%)	31	(10.3%)	22	(7.3%)	21	(7.0%)
そう思う	7	(2.3%)	4	(1.3%)	5	(1.7%)	3	(1.0%)
M（*SD*）	2.49	(1.08)	2.45	(1.02)	2.31	(1.01)	2.31	(0.99)

(2) 保護者の学問への期待、職業イメージ、専門職との関わりの経験が心理・福祉領域の進路推奨に及ぼす影響について

保護者において、自分の子どもが心理学・社会福祉学を専攻することの推奨や、将来の職業として心理職・福祉職を推奨する程度に影響を及ぼす要因として、学問への期待や職業のイメージ、専門職との関わりの経験を想定し、その影響について検討を行った。

以下の分析では、心理と福祉のそれぞれの領域ごとに、周囲に専門職に就いている人の有無と専門職からの被援助経験のどちらか一方でも「わからない」と回答した者のデータは除外した。また両変数は、「はい」を1、「いいえ」を0とするダミー変数として分析に用いた。

心理学への期待、心理職のイメージ、周囲に心理職者の有無、心理職からの被援助経験を説明変数とし、自分の子どもが大学で心理学を専攻することを推奨する程度を目的変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。また、同様の説明変数を用いて、自分の子どもに将来の仕事として心理職を推奨する程度を目的変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、「心理学専攻の推奨」については、心理職のイメージの「自己価値・社会的評価」と心理的援助の被援助経験が有意な正の影響を及ぼしており、「自己価値・社会的評価」が高いほど、また心理職からの被援助経験があるほうが、子どもに心理学を専攻することを推奨するという関連が示された。心理職のイメージの「職務負担の軽さ」は、有意な正の影響を及ぼす傾向にあった。「心理職の推奨」についても、心理職のイメージの「自己価値・社会的評価」と心理職からの被援助経験が有意な正の影響を及ぼしており、心理職のイメージの「職務負担の軽さ」は、有意な正の影響を及ぼす傾向にあった。すなわち、これらの職業イメージが高く、心理職からの被援助経験があるほうが、子どもに将

来の職業として心理職を推奨する程度が高いことが示された（Table10）。

同様にして、社会福祉学への期待、福祉職のイメージ、周囲に福祉職の有無、福祉職からの被援助経験を説明変数とし、自分の子どもが大学で社会福祉学を専攻することを推奨する程度と、自分の子どもに将来の仕事として福祉職を推奨する程度を目的変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。「社会福祉学専攻の推奨」と「福祉職の推奨」のいずれについても、福祉職のイメージの「社会的評価・自己価値」のみが有意な正の影響を示していた。すなわち、福祉職は他者から尊敬され、働く人が成長できるなど働く人にとっての価値が高い職業であると評価する人ほど、自分の子どもに社会福祉学の専攻や福祉職を推奨したいと思っているという関連が示された。また、心理学や心理職の推奨とは異なり、被援助経験の有無は有意な影響を示さなかった（Table11）。

Table10　保護者における子どもへの心理学専攻と心理職の推奨についての重回帰分析結果
（*N*=280）

	心理学専攻の推奨	心理職の推奨
	β	β
心理学のイメージ		
Ⅰ　心の理解とケア	.050	.065
Ⅱ　心理的洞察とコミュニケーション	.125	.138
心理職のイメージ		
Ⅰ　専門性	.015	-.101
Ⅱ　自己価値・社会的評価	.240 *	.269 **
Ⅲ　職務負担の軽さ	.112 †	.104 †
Ⅳ　収入と雇用	-.076	.008
周囲に心理職の有無	-.042	-.093
心理職からの被援助経験	.128 *	.136 *
R^2	.150 ***	.174 ***

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

Table11　保護者における子どもへの社会福祉学専攻と福祉職の推奨についての重回帰分析結果（N=281）

	社会福祉学専攻の推奨	福祉職の推奨
	β	β
社会福祉学のイメージ		
Ⅰ　人間理解と相談	.093	.098
Ⅱ　弱者支援と社会貢献	.146	.106
福祉職のイメージ		
Ⅰ　専門性	-.023	-.035
Ⅱ　社会的評価・自己価値	.248 **	.297 **
Ⅲ　職務負担の軽さ	-.023	-.014
Ⅳ　確実な職務遂行	-.063	-.047
周囲に福祉職者の有無	.052	.022
福祉職からの被援助経験	.024	.036
R^2	.123 ***	.134 ***

***p<.001, **p<.01

考察

本研究では、高校生の心理・福祉領域の進路希望および保護者の子どもへの進路推奨に関する要因として学問への期待、職業イメージ、専門職との関わりの経験に着目し、検討を行った。

高校生が希望する学問領域や職種と、保護者が子どもに推奨する学問領域や職種の度数分布や平均値からは、心理・福祉ともに相対的に希望する・推奨するという選択肢の選択率は低く、それほど希望者が多くないことが示された。多種多様な学問領域や職種がある今日において心理・福祉が取り立てて多く選ばれることはむしろ不自然であり当然の結果と考えられるが、高校生と保護者ではその分布の特徴が異なっていた。高校生においては心理・福祉、学問・職業のいずれにもいても「そう思わない」者が過半数を占めたが保護者においては「どちらともいえない」の選択率が高く、進路に関して子どもの意見を尊重する姿勢が推察された。また、「そう思う」と「ややそう思う」の選択率に着目すると、心理学・心理職は保護者よりも高校生の選択率が高く、社会福祉学・福祉職は高校生よりも保護者の選択率が高かった。

身近に専門職者がいる割合は、高校生・保護者ともに心理職よりも福祉職のほうが高か

ったが、被援助経験に関しては高校生では心理職からの被援助経験のある者のほうが福祉職からの被援助経験のある者よりも多く、保護者においては心理職と福祉職とで大差が見られなかった。1995年のスクールカウンセリング制度創設以来、スクールカウンセラー配置の拡充が図られ、不定期配置を含め小学校で80%以上、中学校と高校では90%を超える学校でスクールカウンセラーが配置されている（文部科学省，2020b）。スクールカウンセラーは多くても週1日の学校での勤務がほとんどで、その結果、子どもの問題に十分に対応できていないとの指摘も見られるが（山崎，2019）、筆者らの経験上、心理職に関心を持つ高校生にはスクールカウンセラーをきっかけとするケースも多いのではないかと推察される。一方、学校で勤務する福祉職としてスクールソーシャルワーカーがある。スクールソーシャルワーカーの実人数と対応学校数は年々増加しているものの2019年度で実人数が2,659名、対応学校数は17,763校にとどまるため（文部科学省，2021）、高校生の認知度は低い可能性がある。

また、高校生、保護者ともに福祉領域のイメージや進路希望、福祉職からの被援助経験といった場合に、どのような職種や援助を想起したのかについても考える必要がある。高校生の医療福祉職の認知度を調べた白濱・安田（2020）によれば、介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士の名前を知っている者は順に90.9%、72.7%、10.4%、内容を知っている者は順に46.8%、10.4%、2.6%、実際に見たことがある者は順に39.0%、3.9%、1.3%であった。介護福祉士は認知度が高く実際に見たことがある者も40%程度いるが、相談援助を行う社会福祉士や精神保健福祉士は認知度が低く、特に精神保健福祉士についてはその名称の認知度も10%程度にとどまっていた。このことを考慮すると、本研究で福祉領域について回答する際に主に介護福祉士の職務が想定された可能性が考えられる。今後、本専修で養成する精神保健福祉士に焦点を当てた研究を行うとともに、高校生の進路選択に関して精神保健福祉士の認知度の向上や正確な情報の提供が重要となると考えられる。

高校生において、高校卒業後に心理学を専攻したいという希望に影響を及ぼしていたのは、心理職のイメージの「社会的評価・労働条件・自己価値」のみであった。また、将来、心理職に就きたいという希望に影響を及ぼしていたのは、心理職のイメージの「社会的評価・労働条件・自己価値」に加え、「周囲の心理職の有無」と「心理職からの被援助経験」であった。一方、社会福祉学の専攻や福祉職の希望に影響を及ぼしていたのは福祉職のイメージの「自己価値・社会的評価・労働条件」のみであった。心理と福祉に共通して、学問や職業の希望には、学問への期待ではなく職業のイメージが関連していることが示された。また、心理職の希望に関しては、周囲の心理職者の存在や、自身や身近な人が心理職の支援を受ける経験によって心理職の意義や価値などを知り、高校生自身の心理職志望に繋がっていることが推察される。本研究では心理職・福祉職に就いている周囲の人の存在や被援助経験の有無という比較的客観的な経験を問うたが、今後は、援助が必要であった自身の経験や専門職からの支援をどのように捉えているかといった点に着目することで、一層、専攻の志望動機についての理解が深まると考えられる。

保護者においては、自分の子どもが高校卒業後に学ぶ学問の推奨と、将来の職業としての推奨に影響を及ぼす要因を検討した。その結果、保護者においても心理と福祉に共通して、学問や職業の推奨には学問への期待ではなく職業のイメージが関連していることが示された。心理学専攻の推奨と心理職の推奨には、いずれも心理職のイメージの「自己価値・社会的評価」と「職務負担の軽さ」、「心理職からの被援助経験」が影響を及ぼしていた。専門家からの被援助経験が影響を及ぼしているのは高校生同様に心理分野のみであり、福祉分野にはそういった関連がみられなかった。社会福祉学専攻の推奨や福祉職の推奨に影響を及ぼしていたのは福祉職のイメージの「社会的評価・自己価値」のみであり、これらのイメージを高めることが、社会福祉学や福祉職の推奨に繋がることが示唆された。

以上のことから、高校生や保護者に対して、心理・福祉領域の職業の職務内容の情報提供に加え、やりがいや職業を通じた成長、どのような社会貢献ができるかといったことに関して情報発信し認識を高めることで、心理・福祉領域の進路希望者のすそ野を広げていくことができると考えられる。また、心理・福祉職に価値を置き専門職に就くことを目指して進学してくる学生に対し、専門教育の一層の充実を図ることは言うまでもなく重要である。

ただし、重回帰分析結果の効果量は保護者においては中程度、高校生においては小さいと判断される値である（水本・竹内，2008）。すなわち、職業イメージがポジティブであったり、身近に専門職者がいてある程度職業のことを理解している学生ばかりが心理・福祉領域の進路を希望しているわけではないということが推察される。進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学することは、「とりあえず進学」と呼称され、学校適応に対して影響を及ぼし、その結果自らの進路を後悔する可能性が指摘されている（山口・堀井，2017）。心理・福祉領域の専門職教育と併せて、様々な動機で心理・福祉領域に進学する学生が卒業後に社会の幅広い分野で活躍することに資する心理学教育、社会福祉教育を展開していくことも重要な課題であると考えられる。

注

1　前身である文学部健康心理学科精神保健福祉コースとしては、2000年度から精神保健福祉士の養成を行っている。

引用文献

ベネッセ教育総合研究所（2013).「教学改革と高校生の大学選択基」View21 大学版 2013 Vol.2 Retrieved from https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/dai201312_P02-22.pdf （2021年10月20日）

学研教育総合研究所（2018). 高校生白書 Web 版　高校生の日常生活・学習に関する調査　Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20200825-mxt_chousa01-1419591_8.pdf （2021年10月20日）

一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会・リクルートマーケティングパートナーズ（2020).「第9回高校生と保護者の進路に関する意識調査2019年報告書」 Retrieved from http://souken.shingakunet.com/research/2019_hogosya4.pdf （2021年10月20日）

神庭直子・河合美子・松田チャップマン与理子・山口一・石川利江（2021）．心理学・社会福祉学への期待と心理職・福祉職のイメージの構造――高校生とその保護者を対象とした検討――　桜美林大学研究紀要．総合人間科学研究，*1*，1–16.

水本 篤・竹内 理（2008）．研究論文における効果量の報告のために――基礎的概念と注意点――　英語教育研究，*31*，57–66.

文部科学省（2020a）．令和 2 年度学校基本調査（確定値）の公表について　Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20200825-mxt_chousa01-1419591_8.pdf （2021 年 10 月 20 日）

文部科学省（2020b）．「相談員・スクールカウンセラーの配置状況」令和 2 年度学校保健統計調査　Retrieved from https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400002&tstat=000001011648&cycle=0&tclass1=000001156246&tclass2=000001156248&tclass3val=0 （2021 年 10 月 20 日）

文部科学省（2021）．スクールソーシャルワーカー活用事業に関する Q&A　Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20210423-mxt_jidou02-000008592_b.pdf （2021 年 10 月 20 日）

成田絵吏・森田美弥子（2015）．高校生の進路選択における親のサポートについて――進路選択に関する自己効力と行動との関連から――　キャリア教育研究，*33*，47–54.

太田千瑞・飯田順子（2018）．高校生が進路決定過程で求めるキャリア・ソーシャル・サポートに関する研究――自律的進学動機の個人差に焦点を当てて――　教育相談研究（筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻カウンセリングコース 筑波大学心理・発達教育相談室），*55*，1–14.

白濱勲二・安田大典（2020）．神奈川県内高校生の医療福祉職の認知度、職業選択、作業療法のイメージに関する実態調査　神奈川県立保健福祉大学誌，*17*，71–81.

谷口（藤本）麻起子・金網知征（2013）．心理学に対する専攻動機と期待に関する調査研究　聖泉論叢，*21*，35–47.

山口 源・堀井俊章（2017）．高校生の「とりあえず進学」と進路選択自己効力との関連に関する分析　教育デザイン研究，*8*，80–87.

山崎勝之（2019）．公認心理師としての学校予防教育から教育臨床へのかかわり方　鳴門教育大学学校教育研究紀要，*33*，85–94.